

高専学生の読書意識に関する一検討

津嶋 高德*・三好 十武士**・佐々木 明彦***
藤井 浩二****

Some Considerations on the Reading Tendency of Our College Students

Takanori TSUSHIMA, Tomuji MIYOSHI, Akehiko SASAKI
Kouji FUJII

Abstract

Present day has been said the age of avoiding printing types or of light reading for a long time. Also in the field of reading, a tendency toward "a sense of play" and being buried in cartoons has been remarkable. So we wonder how our students acquire adaptability to reading in such a tendency.

Therefore, we obtained information through a questionnaire for finding the reading tendency of our college students. As the result, it has become clear that a minority of the students read so called "good books", but that a large majority of them have a tendency for avoiding printing types. So we felt strongly the necessity of guiding our students' reading more closely and carefully on the part of the staff of our college.

1. まえがき

高度経済成長と情報化革命の進行によって、学生の読書意識に変化がみられるようになったことは周知の事実である。活字離れ、軽読時代といわれてすでに久しく、スポーツの分野でもプレーとレジャーの合成語であるブレジャーという言葉が生れているように、読書面でも「遊び感覚」の傾向が目立ち漫画埋没が進みつつある。最近では政治や経済から旅行や会社の案内に至るまで漫画形式が導入され、漫画に一線を画すことが難かしい時代となってきた。この大きな流れの中で学生たちは如何にして読書への適応性を身につけ、知的主体者としての自己の確立に努めているのであろうか。

ちなみに、高専における読書に関するアンケート調査

をあげれば「工業教育の場における図書館について」（金沢 昭和40¹⁾）、「高専図書館はいかにあるべきか」（有明 昭和41²⁾）、「高専図書館の利用状況に関する調査報告」（長岡 昭和50³⁾）、「高専図書館の利用上の諸問題」（秋田 昭和50⁴⁾）など高専創設期の報告がある。その後も「本校学生の読書活動について」（秋田 昭和55⁵⁾）、「読書実態調査アンケート集計報告」（宇部 昭和56⁶⁾）、「読書および図書館利用アンケートの集計調査報告」（宇部 昭和60⁷⁾）、「本校学生の図書館利用の実態とその一考察」（鹿児島 平成元⁸⁾）、「図書館利用に関する実態調査と活性化対策」（鹿児島 平成2⁹⁾）などが散見される。

そこで、本報告は既報の資料を経年的に考察すると共に本校学生における読書意識をアンケート調査して、これを分析しながら高専の教育と図書館活動の在り方についての検討を試みたものである。

2. 調査対象

本調査は本校学生2年169名(回答率97.7%)と4年162名(同93.6%) [全331名(同95.7%)]を対象とした。昭

*宇部工業高等専門学校国語教室

**同上電気工学科

***同上図書係

****同上社会教室

和60年の本校「図書館だより」27号に全学年についてのアンケート調査報告があるので、その資料を参考にして今回は2年と4年をえらび、平成3年7月に実施した。

- ①学科別：機械工学科96名，電気工学科79名，制御情報科77名，工業化学（物質工学）科79名である。
- ②性別：男性は90.9%，女性が9.1%である。
- ③出身地：宇部・小野田地区51.9%，下関地区23.4%，豊浦・大津・萩地区9.4%，山口・防府・吉敷地区8.2%，厚狭・美祢地区3.0%，その他4.3%である。すなわち，学生の大部分は宇部・小野田地区および下関地区といった山口県西部の重化学工業地域で生れ育ってきたものである。
- ④兄弟数：兄弟2人52.3%，3人25.6%，1人16.3%，4人以上6.1%となっている。また長男（長女）が69.5%，次男（次女）が24.2%であった。

3. 調査結果とその検討

本調査は，(1)読書傾向について，(2)専門図書（工学図書）について，(3)図書館利用についての3分野にわたってアンケート調査を行った。質問事項および調査結果は別表に記載した。以下に示す％は2年169名，4年162名，全331名に対するものである。

(1) 読書傾向について

表1の「読書することが好きな方ですか，嫌いな方ですか」については，どちらともいえないが最上位を占め，2年で49.7%，4年で37.0%，一方，4年では読書好きが2年より3.8%増，読書嫌いが2.7%増となっている。この2年と4年との差異は同一グループに対するものではないが，上学年になるにつれて読書に対する意識が明確になってくることを物語っているように思われる。しかし，残念ながら意識に目覚めた4年で約5人に1人が読書嫌いになっている。

表2の「読書好き，又は読書嫌いになった理由，原因として次のどれが考えられますか」については，表1でどちらともいえないと回答した学生の多くが，読書嫌いになった理由の方を回答していることが，アンケートの紙面から伺われ，またその他が2年，4年共に2位を占めていることなど設問の不適切さを反省させられるところであった。1位を占める活字嫌い，めんどうくさいや3位の理解に時間がかかるなどの理由は，まさに，社会病理学的課題といえよう。その上，目をひくのは先生の

表1. 読書することが好きな方ですか，嫌いな方ですか

	2 年		4 年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
読書好き	52	30.8	56	34.6	108	32.6
読書嫌い	32	18.9	35	21.6	67	20.2
どちらともいえない	84	49.7	60	37.0	144	43.5
計	168		151		319	

注)％はすべて2年169名，4年162名，全331名に対するものである。

表2. 読書好き又は読書嫌いになった理由，原因として次のどれが考えられますか

	2 年		4 年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
家庭環境	23	13.6	29	17.9	52	15.7
先生の影響	3	1.8	3	1.9	6	1.8
友人の影響	28	16.6	19	11.7	47	14.2
1冊の本との出会い	16	9.5	13	8.0	29	8.8
活字嫌い，めんどうくさい	47	27.8	53	32.7	100	30.2
理解に時間がかかる	24	14.2	24	14.8	48	14.5
その他	28	16.6	30	18.5	58	17.5
計	169		171		340	

表3. 読書を困難にしている原因はなんですか

	2 年		4 年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
学 習	23	13.6	31	19.1	54	16.3
クラブ	29	17.2	14	8.6	43	13.0
テレビ・ラジオや遊び	59	34.9	71	43.8	130	39.3
読書が嫌い	25	14.8	28	17.3	53	16.0
その他	26	15.4	35	21.6	61	18.4
計	162		179		341	

影響が2年1.8%、4年1.9%と最下位になっており、学生の読書に教官が殆んどかかわっていないことを示唆していた。

表3の「読書を困難にしている原因はなんですか」については、学年により大差を示すクラブが2年で17.2%に対して4年で8.6%と減少して、高学年におけるクラブ加入率の低さをそのまま表わしていた。しかし、退部者によるクラブの%減が設問の学習の%増に移行していない点は注意を要する。平成元年の鹿児島高専における同じ設問でみると勉強(学習)が1位で28.1%、次いでクラブ22.3%、テレビ・ラジオの影響18.2%、読書嫌い16.7%となっている⁸⁾。鹿児島では1～5年の全学年725人に対する%であるが、本校では2年と4年の計331人が対象である。しかし、両者を比較してみるとかなりの相違点や類似点があることに気付く。すなわち、読書阻害要因のトップを本校ではテレビ・ラジオや遊びで占められているのに対し、鹿児島では勉強(学習)となっている。一方、読書嫌いについては両校共ほぼ同じ数値を示しており、この原因こそ更に深く究明していくべきであろうと思う。

表4の「読書に対して最も求めるものはどれですか」については、最上位を占める趣味・楽しみが2年の59.2%から4年では54.3%とやや減少し、2位のひまつぶしは両者共30%である。その反面、学習・勉強が2年の3.0%から4年は10.5%と上り、専門の教養・知識が7.1%から16.1%へ、同様に人生の知恵・生き方が13.6%から21.0%へと4年の方が大きく増加している。

これらの傾向を総体的にみると2年から4年への成長度が具体的な数値で示されており興味もてる。趣味・楽しみやひまつぶしは主として漫画を読むことを意味しているように推測されるが、ストレスの多い現代社会で学生の気分転換に漫画の占める役割をどのように捉えればよいのであろうか。

表5①の「自分で定期購読している月刊誌・週刊誌(漫画を含む)がありますか」については、定期購読誌ありは、2年で57.4%、4年では51.2%となってやや下降している。またその種類は多種多様で69種にのぼり、2年と4年の集計ではオ1位ジャンプ(68人)、オ2位マガジン(36人)、オ3位ヤングマガジン(10人)、オ4位ヤングサンデー(6人)、オ5位ノンノン(5人)などで、いずれも漫画雑誌であった。また、オ1位のジャンプは2年47人、4年21人であり、2位のマガジンは2年22人、4年14人といずれも2年の方が約2倍多かった。漫画世

表4. 読書に対して最も求めるものはどれですか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
学習・勉強	5	3.0	17	10.5	22	6.7
趣味・楽しみ	100	59.2	88	54.3	188	56.8
ひまつぶし	51	30.2	50	30.9	101	30.5
専門の教養・知識	12	7.1	26	16.1	38	11.5
人生の知恵・生き方	23	13.6	34	21.0	57	17.2
その他	8	4.7	8	4.9	16	4.8
計	199		223		422	

表5. ①自分で定期購読している月刊誌、週刊誌(漫画を含む)がありますか
②高専入学後、あなたが最も感銘をうけた本を2冊書きなさい

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
①定期購読雑誌あり	97	57.4	83	51.2	180	54.4
②感銘をうけた本あり	69	40.8	67	41.4	136	41.1

表6. ベストセラーに対してどの程度関心をもっていますか(芥川賞、直木賞など)

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
できるだけ読む	6	3.6	4	2.5	10	3.0
時々読む	52	30.8	61	37.7	113	34.1
全く関心がない	90	53.3	80	49.4	170	51.4
その他	19	11.2	14	8.6	33	10.0
計	167		159		326	

代といわれる世評の如く、時代の趨勢を如実に表わしているといえよう。

表5②の「高専入学後、あなたが最も感銘をうけた本を2冊書きなさい」については、感銘をうけた本ありと解答したものが2年で40.8%、4年が41.4%でその種類は総計118種類にのぼる。オ1位横山光輝「三国志」(15人)、オ2位手塚治虫「ブツダ」(4人)、オ3位ヘミングウェイ「老人と海」(3人)、宮本輝「ドナウの旅人」(3人)、吉本ばなな「キッチン」(3人)、吉本ばなな「TUGUMI」(3人)、朝永振一郎「物理学とは何だろうか」(3人)であった。このうち、1位と2位は超長編漫画である。後述する如く、本校では夏休みの宿題として課題図書をえらび、その読書感想文を提出させたり、あすなろ文庫を設けたりしているにも拘らず、上記のような結果であった。

表6の「ベストセラーに対してどの程度関心をもっていますか(芥川賞、直木賞など)」については、関心をもたない学生が圧倒的に多く、できるだけ読むと回答した学生は僅かに2年で3.6%、4年で2.5%にすぎない。この現象は実践教育を標榜する高専生の特色ではなかろうか。ちなみに、昨年、郷土が生んだ名テナー歌手、下関市出身の藤原義江をモデルに描いた古川薫の「漂泊者のアリア」が、直木賞を受賞した。地元でもビッグニュースになったものだが、同じ下関地区出身者の多い本校の学生にしてからこの関心度の薄さはなんとしたことであろう。

表7の「活字(本)とそれ以外のメディア(ビデオ・テープ・CDなど)へのあなたの関心度はどれくらいですか」については、活字(本)の方がよいは僅少で2年1.8%、4年2.5%となっており、活字離れを如実に示している。視聴覚教育が盛んな時代に育ってきた若者たちにとってはむしろ当然の傾向といえるのであろうか。高度情報化社会では、活字以外のメディアの方が確かに情報収集力は勝るが、インプットした情報を整理し、適切なものとしてアウトプットする能力が重要なものではなかろうか。その能力の養成こそ読書力によって培われるものと考えらる。

表8の「月に何回ぐらい本屋にでかけますか」については、5回以上が最も多く2年で45.6%、4年で29.0%を占め、次に1~2回が両者共に30%弱となっており、1度も本屋に足を運ばないものは僅少である。しかし、重要なのは目的であって、これまでの集計結果をみる限り、はたして肯定的、楽観的に解釈すべきとも思えない。

新刊書に興味をもっていることは推測されるが、漫画の立ち読みではないかと勘ぐるのは杞憂であろうか。

表9の「読みたい本はどのように入手していますか」

表7. 活字(本)とそれ以外のメディア(ビデオ・テープ・CD)へのあなたの関心度はどれくらいですか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
活字(本)の方がよい	3	1.8	4	2.5	7	2.1
活字(本)以外のメディアがよい	84	49.7	74	45.7	158	47.7
どちらにも関心がある	59	34.9	68	42.0	127	38.4
その他	9	5.3	3	1.9	12	3.6
計	155		149		304	

表8. 月に何回ぐらい本屋にでかけますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
0回	6	3.6	16	9.9	22	6.7
1~2回	50	29.6	48	29.6	98	29.6
3~4回	34	20.1	49	30.2	83	25.1
5回以上	77	45.6	47	29.0	124	37.5
計	167		160		327	

表9. 読みたい本はどのように入手していますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
自分で買う	143	84.6	125	77.2	268	81.0
図書館でかりる	17	10.1	37	22.8	54	16.3
友人にかりる	21	12.4	27	16.7	48	14.5
その他	6	3.6	5	3.1	11	3.3
計	187		194		381	

については、この設問自体読みたい本があることを前提又は仮定して回答を求めることになっており、自分で買うが2年、4年共に80%前後を占めている。経済的に恵れている現代社会の若者達が金銭感覚の一端をのぞかせているようにも思われ、読書意識として把えるには無理が感じられる。図書館でかりるのは2年で10.1%であるのに対し、4年で22.8%と大きくアップしているのが目立つ。この傾向は4年で専門書の必要度が高くなることとよく符合している。

(2) 専門図書(工学図書)について

表10の「教科書はどれだけ読んでいますか」については、テスト前だけが圧倒的に多く、2年で57.4%、4年72.2%となっている。予習するときは殆んど教科書を読まず、復習するときに全対象者の16.6%が教科書を使用しているにすぎない。予習・復習するときには2年で16.4%、4年で8.0%とかなりの差がある。まったく読まない学生が2年で4.7%、4年で3.1%いるのは驚きであり、テスト前だけ読むが過半数を占めていることと併せて遺憾である。

表11の「専門の参考書は利用していますか」については、2年で利用していると利用していないが半々であるのに対し、4年では利用しているが82.1%となっている。学生たちは学年が進むにつれて教科書だけでは満足いく勉強ができなくなっていくことを示しており、また、実験やレポート作成のためのみの参考書利用であることも次表から伺える。

表12の利用する参考書の種類はどれですか」については、圧倒的多数を占めているのは4年の実験・レポート用87.0%で参考書利用の目的がここに集中している。この現象もカリキュラムから生じるものであり、やむをえないのであろうが、参考書丸写しのレポート作成にならないよう指導することが肝要である。しかし、2年では講義用や問題集の方が上位を占めており、かなり理想的な数値を示して自発的に学習にとり組んでいる姿が浮んでくる。

表13の「参考書はどのように入手していますか」については、図書館を利用するが2年で29.6%、4年で74.1%と共に最上位を占めているが、総体的にみると参考書利用の目的を示す表12の結果から容易に推測される割合を示している。すなわち、2年で2位に位置する自分で購入する22.5%は問題集がウェイトを占めているからである。

(3) 図書館利用について

表14の「図書館を月に平均何回利用していますか」については、0回が2年で28.4%を占めているのに対し、4年になると14.8%と2年の約半分になっている。これは表12及び表13が示す参考書利用との関連がそのまま図書館利用となって表われているのであろう。その他、5

表10. 教科書はどれだけ読んでいますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
予習・復習するとき	26	15.4	13	8.0	39	11.8
予習するとき	8	4.7	2	1.2	10	3.0
復習するとき	27	16.0	28	17.3	55	16.6
テスト前だけ	97	57.4	117	72.2	214	64.7
まったく読まない	8	4.7	5	3.1	13	3.9
計	166		165		331	

表11. 専門の参考書は利用していますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
利用している	83	49.1	133	82.1	216	65.3
利用していない	83	49.1	26	16.1	109	32.9
計	166		159		325	

表12. 利用する参考書の種類はどれですか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
講義用	42	24.9	5	3.1	47	14.2
問題集	50	29.6	7	4.3	57	17.2
実験・レポート用	31	18.3	141	87.0	172	52.0
その他	23	13.6	5	3.1	28	8.5
計	146		158		304	

回以上が全体で最上位となっていることは注目に値するもので、本校では4人に1人の学生が頻繁に図書館に通っていることを示している。この原因の1つは昭和63年6月より平日は午後9時、土曜は4時30分までと閉館時間が大幅に延長されたことにある。また、寮生活の相部屋でおちつかない学生が相当数図書館を訪れ、読書に励んでいることが伺われる。一方、近年、自宅通学生が多くなったことから、1、2年生が休み時間などに図書館へ行くというケースが増え、それまでにはなかった利用の仕方がされているともいわれている。

表15の「1度に平均何冊かりますか」については、2年で1冊が53.9%、4年では2冊が37.0%となって1位を占め、全体として1～2冊が圧倒的に多く、3冊12.1%、4冊3.0%、5冊以上2.1%となっている。同じ設問を鹿児島高専でみると1冊27.9%、2冊23.0%、3冊21.3%、4冊16.4%、5冊以上11.4%となっており⁸⁾、本校より鹿児島の方が1度にかかりの冊数ははるかに多い。

ちなみに、本校では平成2年度の図書貸出数は13,252冊であり、学生1人当たり平均17冊の本を貸り出している。学年別では4年が最も多く1人21冊、3年が17冊、5年および2年が15冊、1年が13冊となっている。すなわち、4年は進学、就職をひかえて最も充実した高専生活をおくっているのであろう。本校における1人年間貸出数の最高は昭和53年の295冊であった。「本は500冊読むと新しい世界を展望することができるようになる¹⁰⁾」という箴言を身につけて欲しい。図書館関係職員は年間20,000冊を目標に学生に働きかけをしている。

表16の「かりの本はどのような種類が多いですか」については、1位が2年で人文科学(文学、推理小説、SF・ミステリー) 32.5%に対し、4年は1位に専門書64.8%があがっている。次位は両者共に漫画で2年が27.8%、4年が30.9%とほぼ同数となっている。また、この表にみられるように人文科学と社会科学の計が全体で39.3%となっていることから、軽読の時代といわれながらも特定の学生は実に多くの人文・社会系の本を読んでいることがわかる。

表17の「図書館に入れてほしい本を2冊あげて下さい」については、1位を2年、4年共に漫画が占め、全体で35.7%となっている。2位は2年で推理小説、4年で専門書、3位は2年でスポーツ、4年で推理小説などと続いている。学生たちのニーズはこの具体的な数値によってはっきり見えてくる。ナマのデータを現実に起きている現象と重ね合わせてみると、学生たちが実に敏感に時

代の流れに反応していることがわかる。鹿児島高専は同じ設問に対して1位推理小説、2位専門書、3位漫画となっている⁸⁾が、蔵書の構成と調査年度の差異によるものであろう。

表18の「図書館利用で期待するものは」については、

表13. 参考書はどのように入手していますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
自分で購入	38	22.5	8	4.9	46	13.9
友人からかり	20	11.8	10	6.2	30	9.1
図書館を利用	50	29.6	120	74.1	170	51.4
三者兼用	38	22.5	18	11.1	56	16.9
計	146		156		302	

表14. 図書館を月に平均何回利用していますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
0回	48	28.4	24	14.8	72	21.8
1回	41	24.3	32	19.8	73	22.1
2回	21	12.4	27	16.7	48	14.5
3～4回	16	9.5	43	26.5	59	17.8
5回以上	42	24.9	34	21.0	76	23.0
計	168		160		328	

表15. 1度に平均何冊かりますか

	2年		4年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1冊	91	53.9	40	24.7	131	39.6
2冊	26	15.4	60	37.0	86	26.0
3冊	13	7.7	27	16.7	40	12.1
4冊	2	1.2	8	4.9	10	3.0
5冊以上	4	2.4	3	1.9	7	2.1
計	136		138		274	

表16. かりる本はどのような種類が多いですか

	2 年		4 年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
専門書	43	25.4	105	64.8	148	44.7
人文科学*	55	32.5	46	28.4	101	30.5
社会科学**	13	7.7	16	9.9	29	8.8
スポーツ	21	12.4	19	11.7	40	12.1
漫画	47	27.8	50	30.9	97	29.3
語学	2	1.2	7	4.3	9	2.7
自然科学	4	2.4	20	12.4	24	7.3
その他	11	6.5	19	11.7	30	9.1
計	196		282		478	

注) *印は文学, 推理小説, SF・ミステリー

**印は歴史・伝説, 社会科学・世相もの

表17. 図書館に入れてほしい本を2冊あげて下さい

	2 年		4 年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
専門書	20	11.8	40	24.7	60	18.1
文学	17	10.1	14	8.6	31	9.4
推理小説	33	19.5	33	20.4	66	19.9
SF・ミステリー	19	11.2	19	11.7	38	11.5
社会科学・世相もの	4	2.4	18	11.1	22	6.7
歴史・伝説	17	10.1	14	8.6	31	9.4
スポーツ	29	17.2	19	11.7	48	14.5
漫画	68	40.2	50	30.9	118	35.7
語学	2	1.2	7	4.3	9	2.7
自然科学	6	3.6	20	12.4	26	7.9
その他	17	10.1	19	11.7	36	10.9
計	232		253		485	

1位が2年で雑誌・漫画が読める39.6%, 4年で専門書がそろっている50.0%となっている。2位は2年で勉強・読書の場として活用できるのに対して4年では雑誌・漫画が読めるとなっており, さすがに両者間にはかなりの差異がみられる。しかし, 残念なことは4年で勉強・読書の場として活用できるのが4位に位置していることで

表18. 図書館利用で期待するものは

	2 年		4 年		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
新刊書が読める	21	12.4	29	17.9	50	15.1
専門書がそろっている	23	13.6	81	50.0	104	31.4
辞典などによる調べものができる	10	5.9	22	13.6	32	9.7
ベストセラーが読める	17	10.1	16	9.9	33	10.0
雑誌・漫画が読める	67	39.6	38	23.5	105	31.7
勉強・読書の場として活用できる	38	22.5	25	15.4	63	19.0
その他	25	14.8	12	7.4	37	11.2
計	201		223		424	

ある。このアンケート調査結果を一概に否定的, 悲観的に捉えることは如何なるものであろうかとも思う。

4. 図書館活動

昭和58年10月, 全国図書館大会が山口で開催され, 高専からも22校が出席している。当時の記録をみると高専図書館像の模索と組織づくりの努力が伺われる。高専図書館の性格は「学習センターとしての機能を主とし, 高等教育機関としての研究情報機能を従とする図書館であること」また「新しい技術教育を目指す高専において, 実践的技術の体得, 創造力の育成・助長, 教養, 人格の深化を教育内容とする高専の教育と研究活動の中心施設としての図書館であること¹¹⁾」と定義づけられている。これらをふまえた上で, 以下図書館活動を検討してみる。

(1) 図書館だより

創刊号は昭和50年1月で, 図書館委員会により年3回発行し, 図書館についてのニュース, 新着図書を紹介, 教職員の随想などをのせて学生に読書についての関心を喚起させることを目的としている。今, ここで46号までを通読して感じることは, 学生の意向がかなりのスペースを占めていることである。たとえば, 学生の推薦図書, 読後感想文の入選作品, 学生図書委員からの希望事項, 卒業生の読書体験文などがあげられる。また, 図書館だよりにも度々紹介してあるように, 本校では学生の希望図書を自由に書きこめるノートが閲覧室に常備してあり,

毎月、学生図書委員参加の委員会での採否を決める。購入された本は整理が済み次第、希望記入者が優先的に貸出しできる。

教育の現場でこのように教職員と学生のコミュニケーションのとれた情報誌を定期的に発行し、しかも学生全員に配布できることには大きな意義があり、今後とも有効利用を考えていきたいと思う。

(2) あすなろ文庫

昭和59年、高専生としての教養を高めるため、他高専学生の推薦図書なども参考にしながら、本校独自の推薦図書を作者別にまとめて、1つのコーナーに展示した。井上靖の「あすなろ物語」から命名されたもので、名作といわれる日本文学を中心に、世界文学、社会科学、歴史、科学技術方面の教養図書もある。図書館だよりには毎号教官によるあすなろ文庫の解説が掲載されている。人生は短かく、書物は多い。良書の選択が必要であり、何か読みたいけれど、どれを読んだらよいかわからない学生はこのコーナーが助けになるであろう。

(3) 読書感想文コンクール

第1回の入選作品は図書館だより才5号(昭和52年2月)にみられるが、今年度は才16回を迎え、課題図書に次の10冊が選ばれた。①梅原猛「湖の伝説」②郷静子「れくいえむ」③藤原正彦「若き数学者のアメリカ」④サガン「悲しみよこんにちは」⑤三宅泰雄「空気の発見」⑥外山滋比古「ことわざの論理」⑦モーム「雨・赤毛」⑧井上靖「幼き日のこと・青春放浪」⑨有吉佐和子「華岡青洲の妻」⑩壇一雄「リッツ・その愛」である。

校内での才1次審査をパスしたものは、その後、毎日新聞社主催の才29回青少年読書感想文全国コンクール(昭和58年)に応募している。翌59年には角川書店の「第6回文庫による読書感想文コンクール」に応募し、3年化学の藤田一之が佳作に入賞しており、その作品は「読書のよろこび」(角川書店刊)に収録され、出版された。

本校のあすなろ文庫にある大内兵衛・茅誠司他「私の読書法」(岩波新書)、小泉信三「読書論」(岩波新書)、田中美知太郎「読書と思索」(第三文明社)などを一読してもらい、学生諸君の健闘を期待している。

(4) 漢字読み書きコンクール

昭和58年、学生図書委員の起案により検討されて第1回漢字読み書きコンクールが実施された。以来、年1回

選ばれた著名な文学作品から出題して読書力と識字力を競うもので、参加人員は100名前後である。このコンクールは文学作品にふれてその真髄にせまってもらふ意図もあり、前年度は宮沢賢治「銀河鉄道の夜」であった。名作にふれるにはよい機会であるから多数の学生の参加を希望している。

(5) 英単語コンテスト

平成元年、英語科教官の起案により第1回英単語コンテストが実施された。以来、年1回、英文をとおして外国文学への関心を深め、あわせて国際性ないし語学力を養う意図のもとに行われるようになった。英訳50問、和訳50問の計100問で、その正解を競うものである。今年度の課題作品は、ヴェルヌ「80日間世界一周」(AROUND THE WORLD IN EIGHTY DAYS)であり、7月に行った。学生たちは将来、世界にはばたく機会も多くなるのであろうが、そんな折に自分自身のもつ内容によってそれにふさわしい発見ができるというものである。若い柔軟な精神や学力を失わないうちに原著になじめることは幸せといえる。

(6) 読書会

読書会は図書委員会の起案により平成2年に年5回の計画で発会した。初年度は福沢諭吉「福翁自伝」、イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」、横溝正史「本陣殺人事件」をとりあげ、3回実施した。ちなみに、石川高専では昭和52年より図書館主催の読書会が年5回開かれており、これが参考になっているようである。今年度は7月に林屋辰三郎他の「日本人の知恵」、9月にロバート・キャンの「ちょっとピンボケ」で行ったが、図書を選出される教官はその道に造詣が深く、読書会をリードしていかれるので、学生時代だからできる最高のリアルタイムではなかろうか。参加した学生は自分の意見を述べることのトレーニングに意義を見出しているようであるが、この付加価値こそ大きいといえる。

5. 総括及び検討

今回の読書意識に対するアンケート調査の集計を過去3回におよぶ本校の調査結果と比べて目をひくのは、読書の娯楽化、漫画化志向が著しく浮びあがってきたことである。昭和55年の510人を対象とした読書の興味分野の調査では1位推理小説、2位恋愛小説であった⁶⁾。次いで、

昭和59年の504人を対象とした調査でも1位推理小説、2位SF・ミステリーであった⁷⁾。さらに、昭和61年の各学年より選んだ100人を対象とした調査でも、やはり1位推理小説、2位日本文学であり、赤川次郎の作品が推理小説の半分を占めていた¹²⁾。今回331人を対象とした調査では1位漫画、2位推理小説となっており、現実に本校図書館の書架をみて驚かされるのは、超長編漫画である横山光輝「三国志」、横山光輝「水滸伝」、手塚治虫「ブツダ」、手塚治虫「火の鳥」などが手垢にまみれ、ボロボロになるまで読まれていることである。

近年、出版界で「漫画・コミックス」ブームが続いており、平成2年の漫画・コミックスの新刊発行状況は、4,621点、のべ55,000万冊、売り上げ高2,002億円であった。この数値は10年前の水準の漫画2.3倍、コミックス2.6倍である。背景に年令の高い読者層がいるともいわれている。出版科学研究所の佐々木利春氏は「漫画＝読み捨て、と決めつけるのは今や全くの時代錯誤。本として改めて読みたい。蔵書に加えたいと大人に思わせる作品がでている¹³⁾」と分析している。これまで、読み物としては低く位置づけられていた漫画が、評価をかえつつある時代となってきた。

また、図書館だより(第31号、昭和61年)の読者投稿欄にも英語科教官による漫画の推薦図書がみられる。平和を中心テーマにした中沢啓治「はだしのゲン」である。原爆投下直後の広島で生き残った家族とともにたくましく生きていく物語であり、その中には原爆や戦争に対する強い憎しみがこめられている。この本は英訳され、これまでの漫画に対する世間一般のイメージを塗りかえた作品で、またオペラ化されて最近注目を集めている。

漫画も表現形式の一つとしてうけ入れ、いわゆる良書の選択をすれば問題はないといえるであろうが、読書とは何かという原点にたつて考えてみなければならないところまできている。自分の人生が自分のものであるように、読書もまた自分のものである。図書館を知的好奇心を高める場として読書に心を傾ける学生もいるが、一方では刹那的文化による気分転換の場として求める学生も多くなってきたことは事実であり、今後ますますエスカレートするであろう。この急激な変化に対応するためには、図書館関係者のみならず全教職員による蔵書構成の

再検討などを含めた図書館活動を今後ますます活性化していくべきであろう。

6. むすび

読書とは何か。これを定義づけるのは難しい時代がやってきた。学生たちの意識構造に大きな変化がみられ、急速に浮上してきた読書の娯楽化に対処するには、もはや文明論的次元にたつしかないといえれば極論であろうか。

しかし、高専教育の現場ではこれに歯止めをかけるべく、全教職員のキメ細かい指導が要求されるのは論をまたないことである。

参考文献

- 1) 藤島秀隆. 工業教育の場における図書館について(1). 金沢高専研究紀要, 第1号, P.20~32, 昭和40
- 2) 甲木季資他. 高専図書館はいかにあるべきか. 有明高専研究紀要, 創刊号, P.2~54, 昭和41
- 3) 田 健一, 中山信一他. 高専図書館の利用状況に関する調査報告(1). 長岡高専紀要, 第11巻, 1~2号, P.49~86, 昭和50
- 4) 田 健一, 進藤俊一. 高専図書館利用上の諸問題. 秋田高専紀要, 第11号, P.128~134, 昭和50
- 5) 菊地光一. 本校学生の読書活動について. 高専教育, 第3号, P.98~111, 昭和55
- 6) 宇部高専図書館だより. 第14号, 昭和56
- 7) 宇部高専図書館だより. 第27号, 昭和60
- 8) 上村忠昌他. 本校学生の図書館利用の実態調査とその一考察. 鹿児島高専研究報告, 第23号, P.199~205, 平成元
- 9) 平田登基男他. 図書館利用に関する実態調査と活性化対策. 高専教育, 第13号, P.53~60, 平成2
- 10) 呉 智英. 読書家の新技術. P.131, 朝日新聞社, 昭和62
- 11) 宇部高専図書館だより. 第24号, 昭和59
- 12) 同 上. 第32号, 昭和61
- 13) 朝日. 平成3. 5. 25

(平成3年9月24日受理)